境町「朗読ボランティア すばる」

右から代表の小川さん、小野さん、岡田さん、中久喜さん

茨城県最西端にほど近い境町は、圏央自動車道の工事が急ピッチで行われるなど開発が進む一面とは裏腹に、坂東太郎の異名を持つ利根川に育まれ田園風景も美しくのどかな街です。そんなこの地で昭和61年の設立以来およそ30年という長きにわたり、朗読や読み聞かせを中心に地元に根差したボランティア活動を続けるのが今回ご紹介する「朗読ボランティアすばる」のみなさんです。一口に朗読ボランティアと言っても活動は多岐にわたります。活動を始めるきっかけとなった視覚障害を持つ町民向けの町広報誌のテープ録音を始め、敬老の日にあわせて町内の75歳の人全員にお配りするテープ「声の便り」の作成活動。更にはなんと地元境町の全小学校5校で行っている朝の読書の読み聞かせ活動など実にさまざま。そして取材に伺ったこの日は茨城県立境特別支援学校の1、2年生に絵本や紙芝居を用いた読み聞かせが行われていました。

「障害を持ったお子さんたちに対しては何か特別な事をしなくては、と考えがちですが彼らはとても純粋。反応もストレートでこちらが教えてもらうことも少なくないんです。気持ちも新たになりますし、この活動のやりがいを感じることが出来ます。」と語るのは代表を務める小川八重子さん。先輩に誘われてこの活動を始めたという小川さんをはじめ、メンバーは全部で22名。30歳代から70歳代までさまざまな経歴を持つ人材にあふれ、まさにバラエティに富んだ活動の源となっているとのことです。月に一度の定例会で活動の柱を決めるとそこからは図書館での本整理に始まり、読み聞かせの本選び。単に本選びひとつ取っても、その対象の反応も考慮しながらの細かい配慮や創意工夫を伴い、準備にはとても気を遣われるとのこと。

手品に驚きの歓声

パネルシアターも登場

真剣に聞き入る児童たち

大型絵本の迫力にびっくり

そんな地道な活動が結実し、今ではそれぞれの学校ＰＴＡなどにも良い影響がもたらされ、ＰＴＡ独自の活動の幅が広がるといった波及効果や相乗効果につながっているそうです。そして時には感謝の手紙が寄せられることもあり「活動の原動力になりますね」と小川さんは語ってくれました。

今後の取り組みについてお伺いすると「これまでどおりマイペースで続けていきたいですね。私たちがこれまで長く続けてこられたのも、決して無理せずにやってきたから。これを次の世代にも引き継いで行きたい。」明るく笑顔の絶えることのないこの活動に、境町の子どもたちの明るい未来が映って見える。そんな気持ちにさせられた一日でした。

茨城県立境特別支援学校

いばらきの社会福祉
Social Welfare of Ibaraki

PRINTED WITH SOY INK 環境に配慮して再生紙と大豆油インキを使用しています。

発行者／社会福祉法人 茨城県社会福祉協議会
〒310-8586 水戸市千波町1918
電話　029(241)1133(代)
FAX　029(241)1434
http://www.ibaraki-welfare.or.jp/
E-mail　ibashakyo@ibaraki-welfare.or.jp

携帯電話で読み取るだけで簡単に「茨城県社協HP」にアクセスできます。